

# 都計法を巡る 「2つの50年」と 「寅さんの50年」



坂和章平 弁護士  
(弁護士・映画評論家 26期大阪)

1. 昨年11/29には大勲位・中曾根康弘元総理が101歳で逝去したが、戦後の総理として彼以上の人気があり、近時大きく「復権」しているのがブルドーザー宰相と呼ばれた田中角栄。

日本列島改造論を唱え中央官僚の英知を結集させた彼の力によって1968年に新都市計画法が成立した。69年の都市再開発法、70年の新建築基準法と併せて「近代都市三法」の確立と言われるものだ。今年は1964年の東京五輪から56年、1970年の大阪万博から50年後の「TOKYO2020」の年だが、昨年は「新都計法から50年」の節目の年だった。近時の日本は毎年のように、地震・台風・水害が襲う災害列島になっているため災害法制の整備が急務だが、他方で人口減少社会が到来する中で新たな都市法制「まちづくりの法」と政策が求められる。国土総合開発計画から国土形成計画へ、さらには国土縮小計画へ向かうことを余儀なくされる中、都市再生特別措置法の平成26年改正で創設された立地適正化計画の策定「コンパクトシティ」の形成がそのポイントだが、同時に都計法について「2つの50年」の視点が大切だ。

その一つは高度経済成長から土地バブルへ、さらにバブル崩壊から失われた10年に入る中で悪戦苦闘を続けてきた新都計法の1968年から2019年までの50年だが、もう一つは旧都計法が制定された1919年から68年法までの50年。「教盛」を好んだ織田信長は「人間50年」が持論だったが、都計法の寿命も50年と考えれば、都計法を「2つの50年」という視点から分析することの意義が見えてくるはずだ。すなわち「TOKYO2020以降」を目指すべき都計法の「今後の50年」は、

2. 新都計法が成立した1968年は私が大学に入学した翌年で、ベトナム戦争反対と70年安保改定阻止を叫ぶ学生運動真っ盛りの年。69年1月には東大の安田講堂事件も発生した。そんな時代状況の中、米国では67年の『俺たちに明日はない』、69年の『イージー・ライダー』、『明日に向かって撃て』に代表されるアメリカン・ニューシネマが爆発的にヒットしたが、日本では高倉健の『昭和残侠伝 唐獅子牡丹』(66年)が大ヒット。東大駒場祭では「とめてくれるなおっかさん、背中がのいちようが泣いている」のフレーズが大流行した。山田洋次監督の『男はつらいよ』第一作はなんと1969年の8月27日に公開された。主演の渥美清は阪神・淡路大震災発生年の年に公開された第48作『寅次郎紅の花』の翌年、1996年に逝去したが、国民的人気を博した『寅さん』シリーズはその時々の旬の美女をマドンナに迎えながら、『寅次郎ハイビスカスの花 特別篇』(97年)まで計49作も続いた。そんな第一作から50年→2020年のお正月には、『男はつらいよ50 お帰りの寅さん』が公開される。「おかえり寅さん」と言っても、主役は甥っ子の満男。寅さんは回想シーンでチャリチャリの出演だけだ。しかし、博・さくら夫妻はもちろなりりも元気で登場！81年の『浪速の恋の寅次郎』で11歳の吉岡秀隆が演じた満男は、今どこでどんな仕事を？ゴクミンと後藤久美子演じるマドンナ・泉の役割は？そしてストーリー展開は？「とらや」のお茶の間に座って昔話に花を咲かせれば、日本人なら誰でも、あの顔の顔、そしてあのシーン、このシーンが蘇ってくるはずだ。

3. 1949年生まれで私が寅さんシリーズの第一作を観たのは、ちょうど20歳の時。21歳の誕生日を契機に学生運動と縁を切り、一人ぼっちの司法試験勉強に切り替えた私は71年10月に合格し、二年間の司法修習を経て74年4月から大阪弁護士会に登録(25歳)、79年7月には独立した(30歳)。その10年後の1989年は、国際的には天安門事件が起き(6/4)、ベルリンの壁が崩壊(11/9)した激動の年。そしてまた国内的には、瀬々敬久監督の『64(ロクヨン)』(16年)で描かれたように、昭和最後の64年がわずかず7日で終わり、平成の時代に入った節目の年だ。したがって、平成の30年間を終えてちょうど70歳を迎えた2019年は、私にとって弁護士登録から45年、独立から40年の節目の年になった。

そんな節目を感じながら私は本作で「お帰りの寅さん」を実感したが、2020年の正月は是非多くの日本人が本作を観て、それぞれの「あれから50年」を感じてもらいたい。本作をどんな思いで観るかは人によって、世代によってさまざまだろうが、さらに願わくは本作を観て都計法を巡る「2つの50年」を学習し、「TOKYO 2020以降の新たな50年」への思いを馳せてもらいたい。